

《京都》御所と離宮の葉 ～其の二十四～

園林堂と細川幽斎について

桂離宮は、八条宮（桂宮）初代智仁親王としひとにより、宮家の別荘として創建されました。その後、息子である二代智忠親王が建物の新增築を行い、庭園にも手を加えられて、今日に見る桂離宮がほぼ完成しました。建物と庭園が見事に調和し合う日本の名庭園の一つとして、日本のみならず世界的にも有名です。「園林堂おんりんどう」は、そのような桂離宮の中でも独特な雰囲気があり、異彩を放っている建物と言えるでしょう。この園林堂について、以下にご紹介します。

園林堂

おんりんどう

「園林堂」（写真：左下）は桂離宮南側、賞花亭から苑路を下った先としただにあり、八条宮（桂宮）二代智忠親王によって創建されたと伝えられています。桂離宮で唯一の本瓦葺の建物で、持仏堂としての品位を保ちながらも、柿葺の御殿と同様に屋根をわずかに起らせて（ふくらみを持たせて）、柔らかな雰囲気が表現されています。また、建物正面には優雅な曲線を描く唐破風の向拝こうはい（建物中央の張り出した部分で礼拝をするところ）を付け、後水尾上皇の宸筆である「園林堂」の額（写真：右上）が掲げられています。

また、賞花亭から参観経路に沿って進んでいくと、苑路の飛石が園林堂の前で、それまでの自然石から方形の切石（写真：右下）に変わり、持仏堂とし

ての性格を感じ取ることができます。御殿や茶屋とは趣を異にしながらも庭園内で見事に調和するその姿には繊細な工夫が用いられているのです。



扁額「園林堂」 観

現在は模写を掲げ、原品は収蔵施設で保存



園林堂 観



園林堂へ向かう苑路 観

◆ 園林堂の内部

園林堂の堂内には須弥壇（仏像等を安置する壇（写真：右上段））があります。今は何も置かれていませんが、かつては宮家代々の位牌を安置するとともに、観音像や八条宮家と関わりの深い細川幽齋を画いた掛軸（3頁写真：右）と細川幽齋が読んだ和歌の短冊が置かれ、仏事の供養具である三具足が向かって右から燭台・香炉・花瓶の順に置かれていました。

かめがただいつる れんげがたろうたてろうざらはすはぼり
燭台の「亀形台鶴ニ蓮華形蠟立蠟皿蓮葉彫」（写真：左）は銅製でその名のとおり、亀の上に鶴が立っているのが特徴です。香炉の「角形四方ニ菊花浮彫」（写真：右中段）は獅子形のつまみ、外側に広がった耳、獣を象った脚に、炉部側面には菊紋があり、花瓶の「古銅花立御紋付」（写真：右下段）と同様、宮家に代々伝えられた品であることを示しています。

すみこ
明治14年（1881）に第十二代淑子内親王の薨去による桂宮家廃絶の後、位牌は宮家菩提寺の慈照院（相国寺の塔頭）に遷され、その他の掛軸等は宮内省（宮内庁）が収蔵施設で保存することとなり、現在の園林堂は空堂となっています。



須弥壇（園林堂内部）



燭台 亀形台鶴ニ蓮華形蠟立蠟皿蓮葉彫 観



香炉 角形四方ニ菊花浮彫 観



花瓶 古銅花立御紋付 観

◆ 細川幽齋の古今伝授

園林堂内に祀られていた細川幽齋像の掛軸は、
宮家初代智仁親王の業績に傾倒した第八代家仁親
王やかひとの時代に、天授庵（南禅寺の塔頭）の画像をも
とにして画かれたものです。

細川幽齋はなぜ観音像とともに祀られたので
しょうか。そこには、智仁親王と細川幽齋との関
係、なかでも「古今伝授」による幽齋へのあつい
崇敬がありました。

細川幽齋は、安土桃山時代の武将で、足利幕府
將軍の側近として幕府を支えたのち、織田信長や
豊臣秀吉、徳川家康らに仕えました。和歌・連歌
や有職故実、茶道や書道など学問や芸術に秀でて
おり、当時唯一の「古今伝授」相伝者でした。古
今伝授とは、『古今和歌集』の解釈などを秘伝と
して伝えるものです。

智仁親王は細川幽齋の門弟として、歌道や古典
文学などを学ばれ、古今伝授を細川幽齋から受け
られていました。しかしある日、師である細川幽
齋が一命を落とす危機に陥ってしまいます。

慶長5年（1600）7月、関ヶ原の戦いに先んじ、
西軍に田辺城（現京都府舞鶴市）を包囲された細川幽
齋は、決死の覚悟を決め、籠城していました。

智仁親王は師である細川幽齋を救出するために
使者を通じて、開城の進言を行いますが、細川幽
齋はこれを拒否し、途上であった古今伝授の伝統
が途絶えないよう、古今伝授証明書などとともに
「古も今も変はらぬ世の中に心の種を残す言の
葉」という和歌を託し、智仁親王に贈られまし
た。

しかし、古今伝授の相伝者が亡くなることを惜
しんだ後陽成天皇（智仁親王の兄）が勅使を送っ
たことにより、包囲が解かれ、細川幽齋は無事に
城から出ることができました。

その後、細川幽齋から智仁親王へ授けられた古
今伝授は、後水尾天皇、後西天皇、霊元天皇へと
繋がる御所伝授の基礎となりました。



細川幽齋像
宮内庁京都事務所所蔵

◆ まとめ

園林堂は宮家の位牌等を安置するための持仏堂として宮家二代智忠親王の時代に建てられ、位牌や仏具、ゆかりの品などが置かれて、礼拝の場として用いられてきました。

御殿や茶屋と比べると、やや堅い印象で、話題に上ることが少ない園林堂ですが、庭園と調和するた

めの工夫や宮廷文化の伝統を引き継ぐ意思を強く感じることができる歴史的な背景を楽しんでいただければ幸いです。

なお、今回紹介した三具足（実物）や細川幽斎像（パネル）等を桂離宮参観者休所展示室で御覧いただくことができます。



園林堂関係展示コーナー 観

京都御所は幾度も火災に遭い、その度に復興されてきました。次号は、京都御所の防災に関する内容を特集したいと思います。



消火設備動作確認



地震殿 通



松琴亭の藍紙を使った襖と床張付



松琴亭



天の橋立



竈構え



茶室（八つ窓の囲）

◆ 松琴亭

松琴亭は桂離宮内の東方にあり、その位置から書院や月波楼の建物・御池・庭園が調和した景観を楽しむことができます。特に、松琴亭正面北側の天の橋立に優れた石組が見られ、さらにその北側にある鼓の滝つづみから聞こえる心地良い水音が庭園の素晴らしさをより高めています。春にはツツジやカキツバタ、夏にはコウホネ、秋には紅葉が御庭を彩ります。

茅葺を中心とする屋根、面皮柱や土壁、竈くど構えなどが草庵風の雰囲気を醸し出す外観の建物で、室内には藍と白の石畳模様（市松模様）が有名な一の間や藍色の奉書紙のみを用いた襖が目をひく二の間、躍り口のある茶室（遠州好みの八つ窓の囲）、台所などがあります。

このように、松琴亭から望む景観の素晴らしさや本格的な茶事を行う設備が整っていること等から、桂離宮において最も格式が高い御茶屋とされています。



一の間

◆ 松琴亭の襖と床張付の張替え

松琴亭は外観こそ草庵風ながら、室内には様々な意匠が散りばめられています。特に一の間との襖と床の間の張付は藍色と白色のコントラストが特徴的な石畳模様です。意外性がありながらも庭園や建物に調和した桂離宮の中では特に有名なデザインです。

現在、一の間や二の間の襖や張付に用いられている和紙は、平成29年度に張り替えられました。前回の張替えから約30年経過し、藍色の退色が著しい状態となっていたためです。

藍紙は、造営当初どのような色味であったのか、どのような染色技法であったのかが明らかではありませんが、近年の張替えでは昭和34年度、昭和63年度とも藍の浸し染めという染色技法で染められています。浸し染めとは、藍液に漬け込み、水洗いによって酸化させ、自然乾燥をする工法です。これは、色調と工程を重視した結果であるとされていますが、造営当初の紙についての調査は行われていませんでした。

今回の張替えを行うにあたり、造営当初にどのような染色技法が用いられたのかを究明することと、経年劣化への対策を検討するため、紙の類例調査や劣化促進実験を中心に調査を行いました。

類例調査では、宮内庁書陵部所蔵の智忠親王自筆『智忠親王詠草』『智忠親王消息案文等』に薄藍色の料紙が使われている例があり、これらについて、透過光や顕微鏡を用いた観察を行いました。詠草とは、和歌などを紙に書いた草稿で、消息とは手紙のことをいいます。これらに用いられている紙は桂離宮の増造を行った二代智忠親王の身近に置かれていたと考えられます。調査の結果、これらの紙は漉き返しという技法を用いて染められていることがわかりました。

また、昭和の大修理と呼ばれる昭和51年～57年に行われた書院の解体修理時には、漉き返し紺紙の古紙断片が発見されています。このことから、古書院の御役席という部屋に張られている壁の藍紙は漉き返して復元されました。



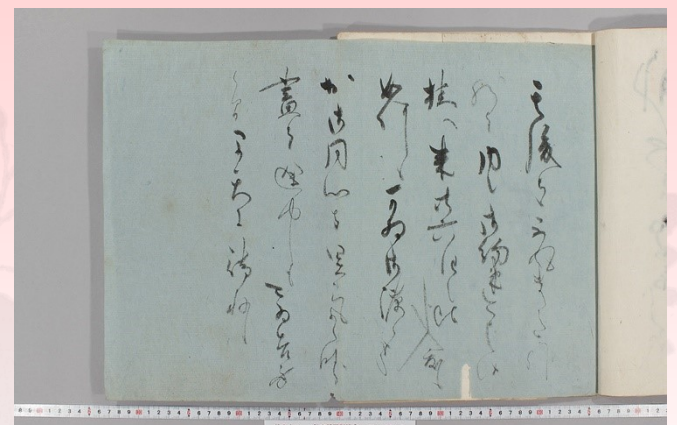
張替え直後の一の間



張替え直後の二の間



古書院御役席



『智忠親王消息案文等』(宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵)



紙漉き



藍液への漬け込み



繊維状にしたものを打ち叩く



漉き返し作業

漉き返しとは、一度藍に浸した和紙を叩きほぐし、もう一度漉きなおす技法です。色むらが出にくく、退色しにくいと言われています。そのため、前回の張替えて用いられた浸し染めと漉き返しでは、劣化速度に違いがあるかを確認するため、メタルハイドランプ（特定の紫外線域を出すランプ）による劣化促進試験を行いました。

その結果、漉き返しの藍紙が浸し染めのものに比べ退色の速度が遅く、1年を通して室内を開放し、公開を行っている松琴亭の襖や張付には、漉き返しの技法を用いることが適していることがわかりました。

以上の類例調査と劣化促進試験により、今回の張替えにあたっては漉き返しの技法を選択することになりました。

◆ 漉き返し紙の製造工程

藍染漉き返しは奉書紙を使用します。奉書紙の原材料である楮の繊維を叩き解し、^{すげた}箆桁を使って紙を漉きます（紙漉き）。次に藍染工房で藍液に漬けます。漬け終わったら空気に触れさせて酸化させ、再び漬け込み、これを10回繰り返しました。その後水洗いを行って灰汁を流し、自然乾燥させます。

藍に染まった紙をお湯につけて繊維状にしたら、それを打ち叩き再度溶かします。液状化したものを濃い藍液の中で箆桁を使って紙を漉き、乾燥させれば完成です。

漉き返しは、色をより均一化させ、退色を遅らせることができます。一方、浸し染めよりも仕上がりの色味が薄くなる場合があります。今回の藍紙製作時は、前回張替えた際の浸し染めの色調を目指し、劣化促進試験の結果をもって通常3回ほど浸すところを10回にわたり藍液に浸し、さらに最初に漉く紙の厚さを通常の半分にするなど、染めきれない部分をできるだけ少なくするなど、より長く鮮やかな色調を維持できるよう工夫しました。

張替工事から4年たった現在は、藍と白の石畳模様が優しく落ち着いた色調となり、訪れる方の目を喜ばせています。



— 桂離宮 —

引手金物 観

桂離宮は計算し尽くされた建築美・庭園美がよく評価されていますが、今回は建具の引手金物にスポットを当ててみます。

桂離宮は4つの御茶屋と御殿などの建物があり、襖や杉戸には様々な意匠の引手金物が使われています。参観順路からは、

しょうきんてい しょういけん げっぽろう
松琴亭、笑意軒や月波楼で工夫を凝らした引手をご覧になることができます。



①松琴亭・結紐形引手

松琴亭には、紐を結んだ形を表した結紐形引手(写真:①)があります。「手掛かり」と呼ばれる手をかける部分を袋に見立て、巾着袋を模しているといわれています。巾着袋には宝物を入れることから「宝尽し」文様の一つに挙げられています。他には螺貝形引手(写真:②)があり、こちらは法螺貝を表しているといわれています。法螺貝等の貝は中国では八宝の一つで吉祥文様として扱われ、日本には「宝尽し」文様の一つとして伝わったとされています。



②松琴亭・螺貝形引手

笑意軒には、矢をモチーフに作成された矢形引手(写真:③)があります。こちらの矢は、矢の先(鏃・矢尻)が狩股と呼ばれる二つに分かれているのが特徴です。

月波楼には、杼形引手(写真:④)があります。杼とは機織りの織物を織る際に 緯糸を通す時に用いる道具です。

これらの引手は金具師 嘉長が制作しました。嘉長は伊予(現在の愛媛)の松山出身で豊臣秀吉の御用などを勤めたため、京都に在住したといわれている人物です。

この他にも、御殿には様々な意匠の引手金物があり、現在は桂離宮参観者休所にてその一部を展示しています。



③笑意軒・矢形引手



④月波楼・杼形引手

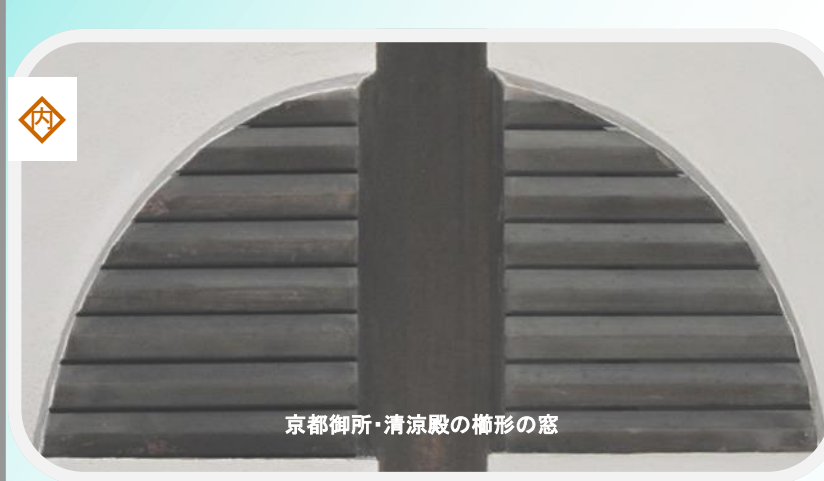
— 御所・離宮 —

窓

採光、通風や眺望のためなどに設けられた窓は、御所や離宮では様々な意匠のものがああります。



京都御所の新御車寄は、大正4年(1915)の大正天皇の即位の大礼に合わせて造られた建物で、内裏の建物ではあまり見られないガラス窓があります。大正時代の板ガラスの製造技術は現在ほど進歩しておらず、少し波打っていました。逆



清涼殿殿上の間にある楕形の窓(写真:中段)は、楕の形をしている木製の窓です。母屋などから殿上の間を覗くことができます。(前頁左下の殿上日給の写真にも楕形の窓は写っています)

泉殿は御常御殿の東側の御内庭内にあり、地震の際の避難所として建てられました。嘉永7年(1854)の火災で被害にあわなかった建物で、文政13年(1830)のものです。簡素な造りの建物の北側には丸窓(写真:下段)が設けてあります。





京都御所・露台(右側は紫宸殿の北廂)



京都御所・露台の連子窓

紫宸殿の北側にある
るだい
露台には連子窓があり
れんじまど
ます。連子窓とは、
れんじこ
連子窓と呼ばれる材を、
縦又は横に並べて組ん
だ窓のことで



仙洞御所・又新亭の丸窓



障子開放時

仙洞御所にある又新亭には、掛け合い組み(破れ井桁)の棧がある丸窓が設けてあります。又新亭は元々ここにあった茶室の止々斎が嘉永の大火で焼失したため、その跡地に近衛家にあった建物を明治17年に移築したものです。京都御所の泉殿は窓の内側の明かり障子(前頁掲載)の棧が掛け合い組みになっている霞障子ですが、又新亭は窓枠の棧が掛け合い組みとなっています。霞障子とは、組子と呼ばれる縦や横に組む材で霞のたなびく様子を表している障子のことで



桂離宮・園林堂正面左右にある連子窓

桂離宮でも様々な窓が見られます。

おんりんどう かとうまど
園林堂には、連子窓と火灯窓(花頭窓)があります。

火灯窓は禅宗様式として伝わったとされ、上部に曲線を持つ形式が特徴です。

園林堂は、持仏堂として仏像や八条宮家などの位牌などが安置されたところです。



桂離宮・園林堂の火灯窓(内部より撮影)



桂離宮・新御殿にある楕形の窓

新御殿にある上段の付書院には、京都御所とは違った形の楕形の窓があります。こちらの窓縁は黒漆塗りとなっています。



連子窓

桂離宮・賞花亭

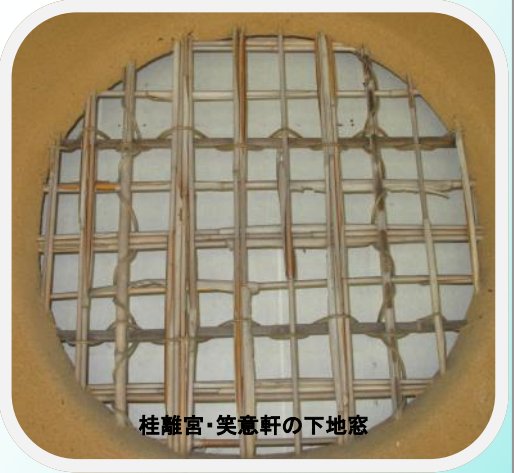
下地窓

賞花亭には下地窓と連子窓があります。下地窓とは、土壁をすべて塗らず、下地を見せたままの状態の窓です。



桂離宮・笑意軒

笑意軒の口の間の欄間には、丸く形成された円形下地窓が6つあります。



桂離宮・笑意軒の下地窓



修学院離宮・窮遂亭

きゆうすいてい

修学院離宮の上離宮にある窮遂亭の北側にも下地窓があります。

この他にも様々な魅力のあるものがあります。参観される際は、何かひとつのものを追ってみるのも、新しい発見につながるかもしれません。



修学院離宮・窮遂亭の下地窓

京都仙洞御所・京都大宮御所案内図



- 1 京都大宮御所御車寄
- 2 京都大宮御所御常御殿南庭
- 3 御庭口
- 4 北池の舟着
- 5 阿古瀬淵と六枚橋
- 6 紀氏遺蹟の石碑
- 7 土橋
- 8 石橋
- 9 鹿滝
- 10 紅葉橋
- 11 紅葉山
- 12 蘇鉄山
- 13 雄滝
- 14 土佐橋
- 15 ハツ橋
- 16 中島
- 17 醒花亭
- 18 栴本社
- 19 洲浜
- 20 又新亭の外腰掛
- 21 又新亭

修学院離宮案内図



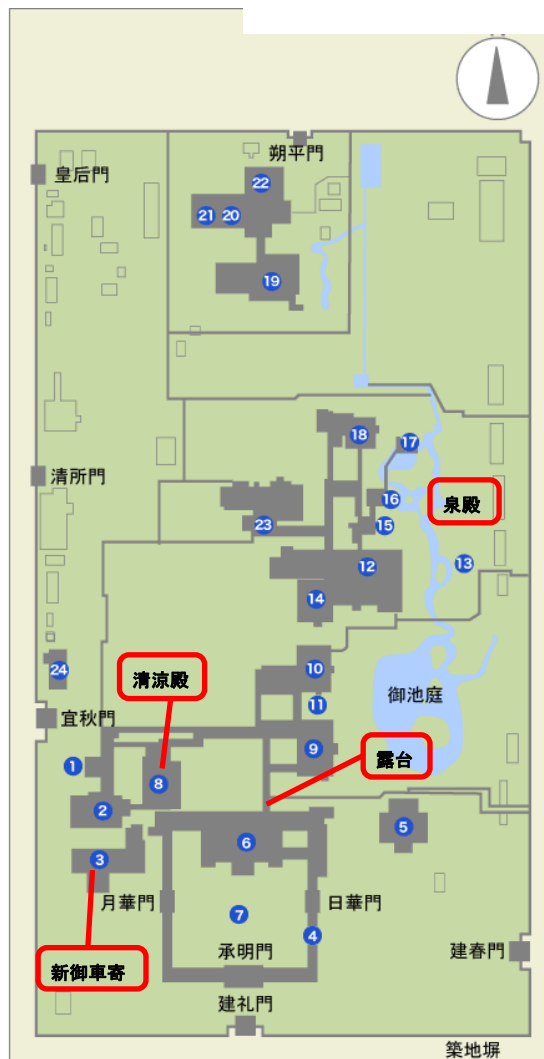
- 下離宮
- 1 御奥寄
 - 2 寿月鏡

- 中離宮
- 3 楽只野
 - 4 客殿
 - 5 松並木

- 上離宮
- 6 大刈込
 - 7 隣雲亭
 - 8 万松塙
 - 9 千歳橋
 - 10 楓橋
 - 11 窮達亭
 - 12 土橋
 - 13 御舟着
 - 14 西浜

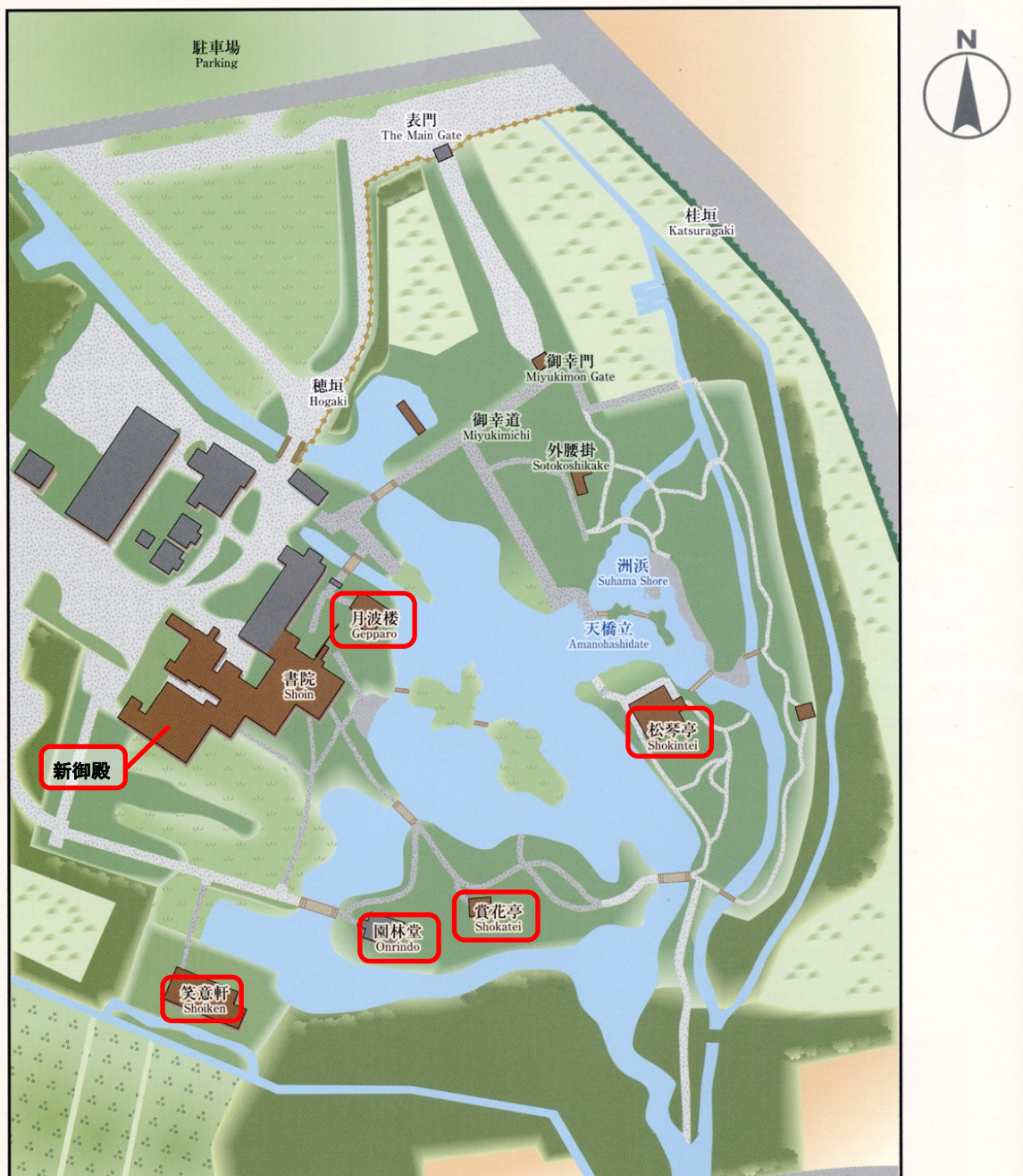
京都御所案内図

- 1 御車寄
- 2 諸大夫の間
- 3 新御車寄
- 4 回廊
- 5 春興殿
- 6 紫宸殿
- 7 南庭
- 8 清涼殿
- 9 小御所
- 10 御学問所
- 11 蹴鞠の庭
- 12 御常御殿
- 13 御内庭
- 14 御三間
- 15 迎春
- 16 御涼所
- 17 聴雪
- 18 御花御殿
- 19 皇后宮常御殿
- 20 若宮御殿
- 21 姫宮御殿
- 22 飛香舎
- 23 参内殿
- 24 参観者休所



築地堀

桂離宮案内図



観マークは、参観でご覧になれます。申込み方法は、<http://sankan.kunaicho.go.jp/> をご覧ください。

通マークは、申込不要の京都御所通年公開でご覧になれます。

詳細は、<http://www.kunaicho.go.jp/info/kyototsunen-sks-sankan.html> をご覧ください。

これまでの「《京都》御所と離宮の栞」については、宮内庁ホームページの[こちら](#)からご覧ください。

<問い合わせ先>

〒602-8611 京都市上京区京都御苑3 宮内庁京都事務所
代表電話：075-211-1211 参観係直通電話：075-211-1215